国際火山防災シンポジウム Cities On Volcanoes 3 に参加して 2

吉田真也※

2003年7月14日から18日にかけて、アメリカ合衆国ハワイ州ハワイ島ヒロ市で行われた“Cities on Volcano3”という火山と防災に関する会議に参加・発表して参りました。これは火山を持つ30以上の国々から300人以上の人々が集まった大規模なものであり、キラウエア火山をはじめとする現地見学会も行われて、貴重な情報と得難い経験をして帰ってきましたので会議の様子を中心に報告いたします。

1 ハワイは火山と津波の島

「ハワイ」と聞けばたいていの方は、観光地で有名なオアフ島のワイキキビーチを思い浮かべることと思います。しかしハワイ諸島にはその他にもカウアイ島やマウイ島などいくつかの島がそれぞれ特徴を持って存在しており、今回の会議の会場となったのはハワイ島、通称Big Islandでした。ハワイ諸島の中で最南端に位置し、最も大きく最も若い、すなわち火山活動が現在でも活発で溶岩流により領土が増え続けている島です。

ハワイ島という言葉を聞いて「?」という顔をする人でも「キラウエア火山」とか「オレンジ色のマグマが海に流れ込んでいる島」といえば、TVのイメージか「ああ、あの島ね」と分かってくれます。それほどこの島と火山および溶岩流は切っても切れない関係にあります。

しかし現地で感じたイメージは災害は溶岩流だけではなく、というより溶岩流は局所的で流下速度も遅いので災害というより観光資源化しております。それが証拠に我々がまず最初にチェックインしたホテルには、フロントの横に「津波の時の心得」が掲示してありました（**写真1**）。これは会場となるヒロ市が太平洋に面した外湾であり、1946年をはじめとして過去何度も津波災害を受けているため、地域住民の中では「自然災害と言えば津波」という意識があるためだと思います。

またその後見学にも行ったのですが、ヒロ市のダウンタンウンには“Tsunami Museum”という立派な博物館があって、一般の人にわかりやすく津波のメカニズムや被害を説明していました。ちなみに英語ではTidal Waveなのですが、「Tsunamiは日本語で湾内の大波を意味する言葉だ」という解説があることから、適切に概念をとらえているわけではなく日本語がそのまま固有名詞として使われています。この辺の事情は“Sabo”や“Nougyou Doboku”と同じですね。

余談になりますが、会議が無い日に西海岸のコナ（有名なリゾート地）のショッピングセンターに行った時も、溶岩流に関する注意やキラウエア火山の模型などが置かれて火山知識の普及に島全体として努めていることを感じました。もっとも我々以外には、日本から来た新婚夫婦以外存在しないようなショッピングセンターだったのですが……。

2 国際言語による会議

さてCities on Volcanoesの様子ですが、議題は火山のメカニズムからハザードマップ作成方法、火山

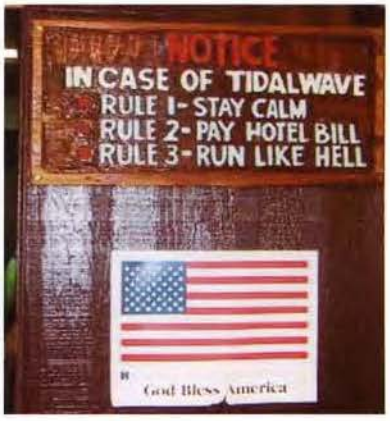

写真1

※（財）砂防・地すべり技術センター総合防災部

知識の普及や火山灰による健康への影響など多岐にわたり、まさに世界中の火山防災に関係する人々がそれぞれ日頃の研究成果を口頭とポスターで発表する、まるで砂防学会のような形態で会議は5日間にわたり行われました。

世界中の人々が集まっているため、発表の内容も英語で書かれたものを英語で発表するのが当然。私も苦労して「富士山噴火を例とした火山灰の被害想定」という発表内容を英語に訳したポスターを貼り付け、質問してくる人と怪しげな英語で意思疎通を図ってきました（**写真2**）。所詮言語はツールなのですから意味が通じればいいのですが、常日頃からツールを用いているネイティブとの差はマウナケア（ハワイ島最高峰）より高く、他人の発表を聞いていても専門的な単語からかろうじて内容を推定する程度。語学力、というよりコミニュケーションおよびプレゼンテーション能力の不足を実感してしまいました。

それから発表を聞いていて感じたことは、「日本人とイタリア人は激しく訛っている英語を話すなぁ」ということです。他の国の人は英語が母国語なのか選ばれたエリートなのか、ネイティブスピード（早口）で話してくれるため何を言っているかサッパリなのに対し、日本人とイタリア人はある一定の法則に従って訛っているうえ、自分が英語下手だということを自覚してゆっくりと確実に話してくれるのでなんとなく意味がわかります。中途半端になめらかに発音するより、シンプルな論理展開でわかりやすい単語を使うのが、相互理解のためには肝心かと。

そのおぼろげな感覚で他の人の発表内容を聞いておりますと、マグマ組成がどうたらという理学的な話ではなく防災行政的な話が目立っていたように感じました。曰く、避難の時はどうした、範囲はどうやって決めた、我が国の体制はこうなっている、などという話でちょうど「火山の防災対策は具体的にどうあるべきか」について検討中の私にとっては非常に参考になる部分（現場の工夫）と参考にならない部分（行政的な仕組み）を知ることができました。でも一通り聞いた後は「どこもタテワリと防災行動のトリガー（いつ避難させるか等）で苦労しているな」と妙な連帯感を覚えてしまいました。

3　味覚の砂漠

さて会議は何日間にもわたるため、その間の体調管理にも気をつけなければなりません。医食同源という中国のことわざにもあるように体調のためには、栄養と味覚のあるものをしっかり食べなくてはなりません。

その点ではアメリカは個人的にはステキな国でした……。

ファーストフードに行ってカタコトの英語でハンバーガーをくれというと、もれなく山盛りでついてくるフライドポテト。地元で有名なロコモコ（なんか一皿飯っぽい）を頼むとやっぱり山盛り。もちろん量がアレなら質もアメリカンです。出された料理のことごとくが期待を裏切らない出来。肉にかかったグレービーソースは「石油から合成したのか？」と思わせる味。お茶などという爽やかなドリンクは存在せず、炭酸＆合成着色料系。サイミン（ラーメン）にラー油と醤油を入れようと思ったら、グレナデンシロップとブルーベリージャムでした。

おまけに会議中の昼食は会場となっている大学の食堂で好きなものを取るビュッフェ方式だったのですが、食堂のオバちゃんに「鶏肉だけ、Onlyチキンで」と言っても、「あんた、ちっこいんだから、もっと食べにゃぁあかんぜよ」（推定）と言われて、何かの肉と野菜が山盛りに盛られてしまう。堆積したスコリアにそっくりなチョコレートケーキ付きで。

「ちっこいってオバちゃん、私もう32歳でこれ以上成長しないと思うんですが？」

と思って周りを見回すと、ワタクシなどCIAに捕まったGLAY並の小人に見えるような立派な体格の紳士淑女たちが。もはや体重の単位はkgじゃない、

写真2

tだと確信完了。

“生物は寒いところでは体熱の放射を防ぐため、体は大きく丸くなる”という説を聞いたことがありますが、きっとハワイは亜熱帯にふさわしく心はおおらかですが、身体的には寒い国なのでしょう。そう思ってツッコむのも疲れたので、黙って（半分ほど）食べてきました（**写真3**）。

もはや行程の最後の方は「話のネタにどれだけハズしたものを味わえるか？」ということが主眼になって、西に怪しげな店があると聞けば飛んでいき、東に地元で（量が）評判の店があると聞けば歩いていく。そんなグルメ？な我々が最後の晩に行こうと取っておいたOsakaという“Japanese&American”レストラン。きっと“タコヤキカレー”とか“お好み焼きトンカツ”とかが出てくるに違いない！と期待していたら、普通のチキンカツとか白身魚の味噌煮とか出てきました。しかもおいしい。

その夜は満腹感と敗北感でいっぱいのまま、南国の虫の声を聞きながら眠りました。

4 Jimmy Norikazu the 3rd

会議場にサトウキビを売りに来ていた日系人のJimmy。ハワイ島でプランテーション農場を営む現地の人ですが、火山にも興味があってビーチサンダルでキラウエアのできたて溶岩の上を歩いた剛の者です。日系人ということでカタコトの日本語というか関西弁で話しかけてきた後、キラウエアの火山博物館で偶然であったのを機に仲良くなっていろいろな話をしました（**写真4**）。

日系アメリカ人のくせにスペイン語が得意なこと、あまり綺麗な格好だと観光客と間違われてスリにねらわれるため服装に注意していること、Jimmyが勤める“トウキョウト”という職場には「ビフリー協会」という独身者相互扶助会があること、ウィンカーも出さずに急に曲がる車にはクラクションを鳴らして現地の言葉で「ダァホ！」と叫ぶこと、etc.etc.

旅は道連れといいますが、国際会議の会場の中で知り合った火山の専門家ではなく、現地にしっかり根を下ろして生きている人が火山や災害について感じたことを聞けたことは大きな収穫でした。Jimmyとは再来年Quito（エクアドル）で行われるCities on Volcanoesでの再会を約して別れて来ました。

5 おわりに

あまり国際会議らしくない話でしたが、いつもとは違う環境の中で単なるオノボリさんではなく、参加者として土地を旅することにより普通では得られない貴重な経験をすることができました。それは行った土地が普通じゃないのか、地元の人が普通じゃないのか、もしくは我々が普通ではなかったのか、読者のみなさまに3択問題を投げかけてこの報告を終わりたいと思います。

写真3

写真4